
ごめんねって言うこと・・・

慧都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ごめんねって言うこと・・・

【Nコード】

N1469G

【作者名】

慧都

【あらすじ】

一人っ子の流花の家に、待望の妹が生まれた。幸せいっぱいはずだったのに・・・少しずつ何かが思っていたものと違っていく。

「ねえママ…男の子かな？女の子かな？どんな子だろ？早く産まれないかなあ。」

「どっちかしらね。でも…きっとルウみたいな元気な子よ。」

一人っ子だった私に姉妹ができる。

妹でも弟でもどっちでも良かった。

ママもパパもいるし、お友達も沢山いる。だから寂しくなんかなかったけど、姉妹が欲しかった。

もうすぐ産まれてくる妹か弟と仲良く遊べたらいいなあと思うだけでうれしかった。

もうすぐ出産予定日というときに、お腹の赤ちゃんが、かなり大きいということ、手術をして赤ちゃんをお腹から出してあげる事になった。

産まれてきたのは、大きな女の子だった。病院のベビーベッドに寝かされている赤ちゃん達の中で、間違いなく一番大きかった。

パパとママと3人で考えた名前は遊花。今日から家は、4人家族だよ。

遊ちゃん…

遊ちゃんとママが退院して、楽しい日々がやってくると思っていた。私は、学校から帰ると

「遊ちゃん、ただいま。お姉ちゃん帰ってきたよ。」

すぐに遊ちゃんのところに行く。

でも…遊ちゃんは、眠っているときのほうが多くてママに

「ルウ、遊ちゃん今寝たとだから、今そつとしておいて。」

そう言われてしまう。

やっと起きたと思ったら、大きな声で泣き出して、ママがオムツを替えたり、ミルクを飲ませたり、でも…ミルクを飲んだらまた寝ちゃう。いったいいつになったら楽しく遊べるのかなあ。

目の前に遊ちゃんはいるのに、すごく遠くにいる気がし始めていた。

「ねえママ、明日図工で空き箱使うから持ってきてって言われたけどある？」

「空き箱？あゝ今ちよつと忙しいから、ルウ探してみて。」

「えっ…わかった。」

遊ちゃんが産まれる前だったら、一緒に探してくれたのにな…そんな些細な事が、積もりに積もっていった。少しだけママに甘えてみたくなって髪を結んでもらおうとしたら、

「ねえママ、髪リボンで結んで。」

「今ちよつと遊ちゃんお風呂だから後でね。」

私は、ママが遊ちゃんをお風呂からあげて落ち着くまで待ってたのに、遅いなあと思って見に行ったら、お部屋の真ん中で遊ちゃんと二人仲良く眠ってた。

家族が増えて、賑やかになって、みんなが幸せになるはずだったのに…

私は、どんどん一人ぼっちになっていくようで寂しかった。最初は、

寂しかったのに、そんな日が続いてくると、今度はどんどん怒りがこみ上げてくる。

それで、ある日ママの大切にしていた、腕時計をお風呂のお水の中に落としてしまった。

ポチャン…

水の中にユラユラ沈んでいく時計を見ながら、

「ママは、もうあたしなんかいらなくなったのかもしれない。遊ちやんさえいたらいいんだ…きつと…」

そんな事を思っていた。しばらく水の底に沈んでいる時計を見ていたら、はっとした。どうしよう。

ママの大切な時計、早く拾わなきゃ。

泣きそうな顔で、拾おうとした時だった。お風呂場のドアが開いて、

「ルウ、こんなところで何してるの？」

ママが入ってきた。私は、慌てて

「何でもないから、出てってよ。」

そう言つてママをお風呂場から追い出そうとした。

私よりずっと背の高いママは、水の中に沈んでいる時計がすでに目に入っていた。

「ルウ、ごめんね。まだルウに教えてなかったもんね、時計は、水につかると壊れてしまつて！」

私は、てっきり叱られると思っていたのに、逆に謝ってくるママがわからなかった。

ママは、もうあたしの事が嫌いなのかもしれない。そう思ったら、悲しくてお風呂場から飛び出した。

心の中では、ごめenneって言うのに口からは、その言葉が出てこない。

気がついたら、何日もママとろくに話しもしていなかった。前は、いつだって楽しく話しが出来たのに…

家にいても、遊ちゃんとママの仲良しを見ている気分になれなくて、友達と公園に遊びに行った。

みんなで遊んでいるときは、楽しかったけど、家に帰る時になると気が重くなった。

気がつくと、家から逆の方向に歩き出していた。

10分位歩いた山沿いの場所に、竜おじちゃんと言うママのいここが住んでいた。竜おじちゃんの家は、鶏を沢山飼っていて、養鶏場をしていた。

いつも玉子をもらいにくる時は、母家にいって、竜おじちゃんか、まきおばちゃんに

「玉子ちょうだいな！」

って言うってから鶏小屋に入って行った。なのに、今日は何も言わずに、鶏小屋に入ってしまった。

しばらく鶏を見ながら、ママの事を考えていた。

ごめenneって言うて許してもらおう。

でも…すぐその後に、遊ちゃんを抱っこして嬉しそうに笑うママが浮かんできて、やっぱりあたしが悪いんじゃない。ママがいけないんだあって思った。

その瞬間目の前にあった、生まれたての玉子を片っ端から投げつけてしまった。みんな投げて割ってしまった時、我にかえた。

「どうしよう…竜おじちゃんとまきおばちゃんに謝らなきゃ。鶏さん、ごめんね。」

そう思つて母家に行こうとして鶏小屋を出た時だった。

竜おじちゃんの姿が見えて、謝りに行くはずだったのに、走つて逃げ出してしまった。

竜おじちゃんは、私に気がついたらしく、遠くで

「流花〜、お〜い流花〜。」

と、私を何度も呼んでいた。

それなのに、私は振り返りもせずに、家に向かつて走っていた。

家につくと靴を脱ぎ捨て、自分の部屋に閉じこもった。

何でこんな酷いことばかりしちゃうんだろ？

どうしたらいいのかわからなくなっていた。

ただ謝らなきゃいけないのに、いつもなら出来ていたはずの事ができなくて、いけない子だつてわかつてるのに、ママがいけないんだあつてすぐいじける。

こんなの嫌だ。

「ルウ、入るよ。」

ママが、部屋に入ってきてても、私は何も言わなかった。

今度こそ叱られるつて思つてたし、そしたらママにごめenneって言える気がしたから。

「ルウ、今ね竜おじちゃんから電話あつた。玉子がみんな割れてたつて。鶏小屋から飛び出したルウを見かけて声かけたんだけど走つて行っちゃったからつて心配してくれてたの。」

ママは、そう言って私の隣に座った。

「ルウ、ご飯を食べる時に、いただきますって言うじゃない！あれはね、あなた達の命をいただきますねって、ありがとうって言う気持ちで言う言葉なの。だから、鶏さんが一生懸命みんなの為に生んでくれた、大切な玉子なの…もうなげたりしないよね。」

そう優しく言った。ママが、私を叱らないのは、何故？

やっぱりもう嫌いになってしまったのかもしれない。

ママ、ごめんね。って言うはずだったのに、また言えずに、うなずくだけしかできなかった。

ママは、

「約束ね。ママは、ちょっと竜おじちゃんどこに行ってくるから。」

そう言って部屋を出て、遊ちゃんを抱っこしながら、出かけて行った。

本当なら、私が行って謝らなきゃいけないのに、でも素直になれない私は、ママに気がつかれないように、後をつけて行った。

竜おじちゃんの家の垣根に隠れながら、こっそりママと竜おじちゃんが、話しているのを見ていた。間違いなく竜おじちゃんは、ママを叱っていた。

遊ちゃんを抱っこしながら、頭を下げて誤っているママ。

ごめんね。

心の中では、いつだって言えるのに。

泣きながら、家まで走って帰った。

泣きながら、いつの間にか眠ってしまっていたらしく、気がついたら朝だった。ちゃんとベッドに入られて、お布団まで掛けてくれたのは、ママだってわかってる。

どうしたら、素直になれるんだろ？
今の私には、それがわからなかった。

もやもやした気持ちが続いて、
近所の畑のスイカを割ってしまったり、ペットのうさぎのウーちゃんをキャベツ畑に放してキャベツを台無しにしてしまったりした。
けれども、ママはいつも私を叱らなかった。そのたび農家のおじさんやおばさんに謝って回っていた。

そんなある日授業中から雨が降り出し傘がないなあと思っていたら、ママはちゃんとげた箱まで傘を持ってきてくれていた。それなのに、きつと遊ちゃんを抱っこして、楽しそうにお散歩しながら学校まできたんだろうなあなんて意地の悪い事を考えた私は、せっかく持つて来てくれたはずの傘をおきっぱなしにして、ずぶ濡れで帰った。
家につくとママは、

「ルウ、大変びしょ濡れじゃないの。風邪ひくわよ。」
そう言っバスタオで体を拭いて着替えを出してくれた。

「ママげた箱に傘置きに行っただけ、気がつかなかったかしら？」

返事もしない、酷い娘だね私。

前ならありがとって言っただのに。

今は、何でいえないんだろう？

雨に濡れたせいか、次の朝少しだけ頭痛がした。

それでも、家にはいたくなかったから、ママには、何も言わずに、学校へ行った。

授業中頭痛がどんどんひどくなっただけ、

誰にも言わずに授業は終わった。学校からの帰り道、激しい頭痛と吐き気に襲われて、フラフラしながらやつの事で家に辿り着いた私は、玄関のドアを開けると同時に、その場に倒れこんでしまった。いつもなら、玄関のドアを開けると、

「ただいま！」

と元気よく言うのにそれさえも出来ず、動けなかった。

ドアの開く音に気づいたママが、

「ルウなの？ただいまも言わないで、変な子ねえ。」

そう言いながら、玄関まで出てきて、倒れ込んでいる私に気づいて、慌てて私の体を抱き上げた。

「ルウ、ルウ、凄い熱…大丈夫？ルウ…」

ママの声は、良く聞こえてたし、自分でも一生懸命返事をしているのに、言葉になっていなかったらしい。

ママは、私の体からランドセルをとり、ベッドに横にして頭を冷やした後、かかりつけのお医者さんに電話をし、予約をしてくれた。目も開けられない…

口も聞けない…

それなのに、ママがしている事が良くわかる。

ママは、バタバタと病院へ行く準備をした。玄関に誰か来たようで話し声がした。かすかに聞こえた話し声は、まきおばちゃんに、遊ちゃんを預け

「すみません、よろしく願いします。」

と言っているママの声だった。
30分位たった頃ママが、

「ルウ、病院行くからね！先生に、見てもらおうね。」

そう言っで私の体を抱き上げた。

重たいはずの私を細い腕で、抱きかかえて車まで運んだママは、急いで病院まで車を走らせた。

病院に着くとママは受付に走り込み、車椅子を借りてきてくれて、看護婦さんと二人でぐったりしている私を車から車椅子に乗せた。

予約の電話をいれてくれていたせいか、待つ事もなく、診察室に通された。

先生に、熱を計ったかと聞かれ、慌てて連れてきたので計っていないとママが答えた。

看護婦さん達が私を、診察室のベッドにさせてくれて体温計で、すぐ熱を計り始めた。

「39度です。」

看護婦さんが、先生に言う。
ママは、ビックリした顔で、

「39度って…先生、こんなに高い熱初めてなんですけど…娘は、大丈夫なんでしょうか。」

先生に問いかける。先生は、まあ落ち着いてとママの肩に、手をのせてから、私の診察を始めた。

聴診器をあてたり、お腹を触診したり、喉の様子をみたり、ひとしきり診察を終えると、

「喉が赤いなあ、扁桃腺が腫れてるからそこから熱が出たんでしょう。薬を3日分出しますので、また見せに来てください。」

そう言った。

ママは、

「ありがとうございます。」

そう言って頭を下げた。

診察も終わり、薬ももらい、娘を車に乗せて家に帰る。

ママは、助手席でぐったりしている私をチラチラ見ながら運転していた。

心配してくれているのが良くわかる。

「ありがとう」そう言いたかった。でも、言葉にならなかった。

家に着くと、ママは、私をベッドに寝かせて頭を冷やしてくれた。頭を冷やしてもらつと、気持ちが良かった。

ママは、白湯と今病院でもらってきた薬を持ってきて、

「ルウ、お薬飲める？頑張って飲もうか！」

そう言って粉の薬を白湯でこねて、飲みやすくして口にいれてくれた。

白湯も一口なんとかやつと飲み込んだ。

ママも、私が薬を飲んだ事で、少しほっとしたようだった。ママの少し安心した様子を感じたせいか、私はそのまま朝まで眠り続けた。

翌朝、カーテン越しに明るい日差しをまぶしく感じて、目が覚めた。

体は、鉛のように重く、頭痛もひどい。昨日より、吐き気がひどく
なったみたいな感じがした。どうにか重い体を動かそうと、ベッド
の中でもぞもぞしているところにママが来た。

「おはよう！無理に起きなくていいからね。具合はどう？何か食べる？」

ママに聞かれて何とか返事をした。

「頭痛い…気持ち悪い…」

ママがうなずきながら、体温計を持ってきて、熱を計ってくれた。
ため息を一つついた後でママが、

「ルウ…まだ熱が高いは今日は、ゆっくり休みなさい。お薬は、飲もうね。今持つてくるからね！」

そう言つてママは、部屋を出ていった。天井がグルグル回つてるみたいに感じて目を開けていると、余計に気持ち悪い気がした。すぐにママがお薬と白湯を持ってきてくれたけど私は、飲み込める自信がなかった。

昨日のように、ママが薬を白湯で練つて口に入れてくれた。なかなか飲みこめない。白湯を一口含むとやっぱり飲み込む事ができずに、みんな吐き出してしまった。

ママは、それをかたずけながら、

「無理に飲ませちゃったからかな…ごめんね。もう少したつたらもう一回お薬飲んでみようね！ルウ…ゆっくりお休み。」そう言った。

ママが悪いわけじゃないのに、
謝られて悲しくなった。次は、お薬ちゃんと飲めたらいいなと思っ

ていたのに…

次も、その次も、

お薬はまともに飲むことが出来なかった。薬と言うより、口に入ってくるものは、全て飲み込むことが出来なくなっていた。

3日が過ぎ明日は、病院と言う日の夜に話声がするのが気になって目が覚めた。パパの声がする。

でも、パパは怒鳴っていた。「お前は、流花の母親だろ！病院でもらった薬もまともに飲めないんだぞ！良くならないなら、もっと大きな病院連れてくとか、考えられないのか！」

私の事で、ママが叱られてる。パパは、人見知りもしない、お転婆な私の事をいつも、元気があっていいよなと可愛いがってくれていた。

そんな大好きなパパが、ママを怒鳴るなんて…

ベッドから飛び出して行って、

ママが悪いんじゃないって言いたかったのに…

それが出来ない悔しさと、

「気がつかなくて…ごめんなさい。明日大きな病院にルウを連れて行ってきます。」

ママは、悪くないのにパパに謝ったりしたので、私の目から涙が沢山こぼれた。私のせいで、ママとパパが喧嘩してる。そう思うだけで、悲しくてたまらなかった。みんなで幸せになるはずだったのに…
…どんどん幸せから遠くなっちゃう。

早速次の朝ママが、

「今日は、いつもと違う大きな病院に行ってみようと思ってるの。ルウが、早く治る方法を調べてもらおうと思って。」

そう言った。

パパに叱られた事なんか無かったことのような優しい笑顔で言う。

「ママ…ごめんね。」

またそう言いたいののに、言葉が出てこない。
首をたてにふるのがやっとだった。

ママが抱きかかえて車の助手席に乗せてくれた。

1時間も車での移動は、さすがにきつくて病院に着くまでに、何度も吐いてしまった。

いつもの病院とは、わけが違って、待合室は人で溢れていた。ママが、私を抱き上げて運んできたのを看護婦さんが見て、

「こちらに、寝かせて下さい。まだ順番までしばらくかかってしま
いますので…」

そう言ってベッドをかしてくれた。

ママは、何度も頭を下げ、

「すみません。ありがとうございます。」

と言った。

病院のベッドの上で白い天井が、グルグル回っている。

知らないうちに、私は眠ってしまっていた。

どこか遠くで声がする。

誰？

「酷い脱水状態です。今すぐ入院して下さい。何故もつと早く連れてこなかったんですか？流花ちゃんの名の保証は出来ません。今日もちこたえてくれたら良いんですが…」

その言葉にママは、泣きながら

「先生、お願いです流花を、流花を助けて下さい。お願いします。」

何度も頭を下げをお願いしてる。

私が…

死んでしまうの？

まるで、他人ごとのような感じがした。腕に鈍い痛みを感じて、ふとみると点滴をされていた。

そのまま小児病棟に移され私のベッドの周りのカーテンが閉められた。

ママは、

「ルウ、ママお家に帰ってパジャマとかお着替えもってくるからね！すぐくるからね。」

力なくうなずく私を見て、ママは病室を出ていった。

ママ…

私のせいで、今度は病院の先生にも怒鳴らてしまった。いつもいつも私のせいで…

「ママ…ごめんね…」

何度も繰り返し思った。
もし私がいなかったら…

ママは、いろんな人に怒られなくてすんだのになあ。

いろんな人に謝らなくても良かったのになあ。ポロポロつと涙がこぼれた。

「流花は、泣き虫さんだなあ！いつもは、いたずらばかりしてるくせに。」

病室で一人のはずなのに、ふいにそう言われてびっくりした。点滴をされて動けないはずの私が、ベッド上から飛び起きた。

窓際の手すりに寄りかかって、にっこり笑うおじさんがいた。どこかで逢った事のあるような優しくて温かい笑顔のおじさんだった。

「おじさん誰？」

ベッドの脇に降り立った私が、振り向くとそこには、もう一人私が眠っている。

「どうして…どうして寝てるのに…あたし…」

何がなんだかわからなくなって、頭を抱えて座り込んでしまった。

おじさんが笑いながら、

「流花、怖がる事はない。さっき流花が流花さえいなかったら…そんな馬鹿げた事考えてたから、流花と話がしたくなってな！流花にちよつとばかり、体の中から出てきてもらったんだ。」

そう言つて、私の頭を優しくなでた。

「おじさんは、あたしを知ってるの？どこかで逢った事があるみたいんだけど、あたし…思い出せなくて…ごめんね。」

「もちろん流花の事は、よく知ってるぞ。今は無理に思い出さんでもいい。いつかわかる時がくるはずだ。」

そう言つて楽しそうに笑つた。

「なあ流花、お前は確かに、いつもいたずらっ子のお転婆娘だ！何故いつもいたずらばかりしてるんだろな？」

おじさんが聞いてきた。

「あたしね…ちょっと寂しかったの。だってね…パパはお仕事だし、ママは、遊ちゃんのお世話で大変だから…」

ニコニコ笑いながらおじさんは、うなずいて聞いていてくれる。

「わかつてるの忙しいって！でもね…あたしは、遊ちゃんにママを取られちゃったみたいで、一人ぼっちになったみたいに寂しかったの。」

私もパパもママも待望の赤ちゃんが産まれて、。

嬉しかった。

沢山かわいがつてあげたかったし、いろんな事をして遊んであげたかった。

それなのに…

ママが遊ちゃんにかかりつきりだと、私もいるよつてわかつて欲しかったし、甘えたかっただけ。私の中で寂しさと思い事したわけじゃないと思う苛立ちがどんどん膨らんでいった。

ママに返事もしないで、家を飛び出しその苛立ちを、いろんないた

ずらで解消していたのかもしれない。

「そうだよな流花。でもな…いたずらして周りの人を困らせた後、流花はいつも楽しかったかな？」

おじさんは、私の顔を覗きこんだ。

「楽しくなかったよ。いつもやってしまった後で後悔したもん。何でこんな事したんだろって。でも、ママがいけないんだから…遊ちゃんがママを取っちゃったからいけないんだもん…って思ったら、ごめんねって言えなくなってた。謝らなきゃいけないのに…」

そう言いながら私は、泣き出した。

おじさんは、ベッドの脇の椅子に腰掛け私を、膝の上に抱き上げた。おじさんの膝があまりに暖かくて、私はまるで教会で懺悔している気分だった。「あたしね、ママの大切な腕時計をお風呂のお水の中に落としたし…竜おじちゃん家の鶏さんの玉子みんな割ったり…」

泣きながら話をしている私の後を、おじさんは続けて話す。

「そうそう、それから、隣の畑のスイカめちゃうやに割ったりもしてたなあ。流花がパパとママにねだって買ってもらったウサギのウーを、キャベツ畑に放してキャベツ畑を台無しにした事もあったしな！」

そう言っておじさんは、愉快そうに笑った。

「おじさんは、魔法使いなの？あたしが、話してない事までみんな知ってるのね。」

「あははは…流花の事ならなんだって知ってるさ！おじさんは、魔法使いじゃないけど、いつだって流花と一緒にいるんだ！」

本当に不思議なおじさんだった。

おじさんには、何でも話せてしまう。

何より、点滴をしながらベッドの上で眠っている自分を見ながら、見知らぬおじさんと話している自分が、信じられずに夢の中なのかもしれない！

きつと夢の中の出来事なんだと言い聞かせ、おじさんと話しを続けた。

「あたしは、悪い子だよ。そんな事ばかりして…ママを困らせてたもん。遊ちゃんが生まれて嬉しかったんだよ。だけど、パパもママも前より遠くなつた気がして…寂しかった。あたしもいるよって気がついて欲しかっただけ。」

私は、そう言うとおじさんの広い胸に顔をうずめた。そして、

「だからかなあ…あたしが悪い子だから、病気になつたのかな？あたしが、このまま死んでしまったとしたら…もうママ誰からも叱られないでしょ！」

ポツリと言っておじさんを見上げた。

おじさんは、変わらない優しい目で笑いかけながら、

「流花：ママは、遊花の事も流花の事もとても大切なはずさ！ただ流花の言う通り、まだ自分で何も出来ない赤ちゃんの遊花の事やみんなのご飯を作ったり、お買い物したり、お掃除したり、忙しくて流花を大切だつて事伝えてあげられなかったただけだ！」

誰も言ってくれた事のないその優しい言葉が嬉しくて、今までしてきた酷い事をママに謝りたくて涙が止まらなくなっていた。

「ママの時計を水に沈めた時、ママは何て言った？」

涙を手で拭きながら、

「えっと…ルウ、時計はね、

水に落とすと壊れちゃうの！もうわかったよね。ママ教えるの忘れてたよね！ルウごめんねって言った。」

私は、

「何てことするのよ！ルウこんな事したらいけないってわかってるでしょ。」

そう言っただけで怒られるとばかり思っていた。それなのに、ママは、優しく私を諭しママが謝ってきた。私は、余計にごめんねが言えなくなってしまったのだ。

「うん…じゃ、竜おじちゃんの養鶏場の玉子落としてみんな割った時は、なんて言ってた？」

「うん…せつかくみんなに美味しく食べてもらうために、鶏さんが、一生懸命産んでくれた玉子割ってしまったらたべられないですよ！ご飯を食べる時に、いただきますって言うのは、大切な命をいただきますねって言う事なのよ。って言って竜おじちゃんにすいませんでしたって謝ってた。スイカの時も…キャベツの時も…いつもそう叱らないで、優しく説明された。優しく言われて、あたしいつもごめんねって言えなくなっただけ…意地悪な言い訳ばかり考えて…」

そこから先の言葉が出てこなかった。

おじさんは、そんな私をただ優しく抱きしめてくれた。どれくらい経っただろうか。

ふかふかな雲に抱かれているような心地よさの中で、ゆっくりおじさんは、話し始めた。

「流花：ママはね、きっと流花が淋しい思いをしてるって感じていたんじゃないだろうか？」「えっ！どうして？おじさんは、どうしてそう思っの？」

驚いておじさんを見つめた。

「そりゃ、遊花が生まれて、流花の事なかなかまってあげられないうって思って悩んでいた事おじさんは、良く知ってたからさ。甘えさせてあげたくてもなかなかそうさせてあげられなかったから、流花がいたずらばかりして、ママの気を引いてるんだろなってわかってたんだな流花のママは！」おじさんは、まるで世界中の出来事が何でもわかってるように話す。

正直なところ、私はひねくれていた。

ママが私を叱らない事で、私の起こす面倒に付き合いきれないだけなんだと思い込んでいた。

だから…余計に寂しくて悔しかったのに、

「じゃあ何でなの？ほかの子は、みんな叱られるでしょ？ママは、何でおこらなかつたの？」

「あははは！怒らなかつたんじゃない、怒れなかつたんだよ流花を。」ポカンとしている私を見ながら、おじさんは続けて言った。

「流花は、そんな事好きでやってるはずがないってわかってたんだ、ママは自分のせいで、人が悲しむようなイタズラをしている娘を叱れなかったんだきつと。二人とも、ボタンを掛け間違えたんだ。」

そう言うとおじさんは、目をつぶった。ボタンを掛け間違えた？その意味を知りたくて、聞こうとしたのにそうしないでおじさんが話し始めるのをじっと待った。「流花…ママもお前もお互いをととても大切に思っ、そして愛している。それなのに、一番大切なはずの、ママが大好きって事をママに伝えていないだろ？ママもだ。」

遊花も大切だけど、流花も必要なんだと伝えていない。だから、こんな思い違いが生まれてしまった。流花が病気になったのはきつと大切に思い合う親子の姿をみた神様が少しだけ間違っ、てかかってしまったボタンを掛け直してあげたいと思ったからじゃないだろうか？「考えた事もなかった。ひねくれていた私は、いつかパパもママも遊ちゃんがいれば、私がいなくなっても楽しく暮らしていけるんだろうなと思ひ込んでいたのだから。」

こんな私の事ママは、好きでいてくれてるなんて…嬉しかった。

ただ嬉しくて、涙がこぼれた。そんな私を見つめながら、おじさんが言う。

「流花は、いつからこんなに泣き虫になったんだろな。沢山泣きなさい。いろんな事に気がついてい、ろんな事に傷ついて、いつか優しくして強い女の子に育って幸せになりなさい。流花の中の生きる力が溢れてくる。きっと元気になれるよ。さあ…そろそろお別れの間だ、ベッドにもどりなさい。パパをママを妹を大切に！楽しい時間をありがとう流花。」

そう言っ、て、ほっぺに優しいキスをして、私をベッドの私の上に重ねあわせるようにおろした。

「行かないでーずっと、ずっと側にいてお願い。」私は、そう叫んだ。

ぱつと目をあけると頭痛がして体が重いのに、吐き気がおさまっていた。

首を窓のほうに向けたけど、パイプ椅子にも窓辺にもおじさんは、いなかった。それなのに…

かすかに、聞こえたおじさんの声。

「流花…いつも一緒にいるよ。元気になったらちゃんと言いなさいママに大好きだと…」

目には見えなくても、きつとおじさんは一緒にいてくれるんだよね…

「ありがとう。きつと元気になってママに大好きって言うからね。見ててね、おじさん。」

私は、そう心の中で話かけながら眠ってしまった。

翌朝目覚めると…

点滴がきいたのか、おじさんの心の治療が良かったのか、私は奇跡的に回復した。水分もとれず、薬も飲めなかった私が、看護婦さんに

「のど…かわいた…何か飲んでもいい？」

そう言ったのだ。

看護婦さんも先生も驚いていた。

そして、マグカップに白湯を入れて、手渡してくれた。

あれほど気持ちが悪かったのが嘘のように、ごくごくと飲んだ。

「おいしかったあ。」

ふう…

そう満足気に笑う私を見て、先生も看護婦さん達も笑い出した。

「飲み物が、これだけ美味しそうに飲めたらもう心配なしだ！」

先生にそう言ってもらえてほっとした。そうになると、早くママと話がしたくなって落ち着かない。

完全看護の病院らしく、午後にならなければ面会ができないらしい。元気になってきたのにママがいないのがもどかかった。

何日も食べ物がたべられなかったからなのか、元気になった証拠なのか、無性にお腹がすいてきた。看護婦さんにお腹がすいたと言うと、

「ずっと食べていなかったから、急に食べ物をお腹に入れてしまうと、お腹がびっくりしてしまうから、もう少し我慢してね！白湯あげるから。」

しぶしぶ了解して、白湯をすすする。

お昼ご飯は、食べさせてくれると言っていた。それを楽しみにベッドに横になる。

大きな窓から良く晴れた空が見える。

ママは、どうしてるだろうか？

遊ちゃんは、どうしてるだろうか？

パパは、もうママを怒ってないだろうか？

早くママに会いたいなおもったり…

ママに会ったら、最初に何て言ったら良いんだろか…

そんな事を考えているうちに、

「流花ちゃん、お昼ご飯持ってきたわよ！無理しないで食べれるだけにしてね。」そう言って看護婦さんが食事の乗ったトレーを持ってきてくれた。

吐き気が治まって、食欲がわきまわっている私が、残すなんて事あるわけないじゃない。そんな事思いながら、トレーの上を見てびっくりした。

「えっ…これが食事なの？」

思わず看護婦さんにきいてしまった。

「そうよ！ゆっくり時間をかけて食べてね。野菜のポタージュにお粥よ、栄養満点だからね！」

そう笑顔で言われると、何も言えなくなった。せめて玉子いりのお粥が良かったなあ。プリンとかヨーグルトとか食べたいなあ。思い描く食べ物は、どれをとっても風邪をひいた時に、ママがいつも用意してくれるものばかりだった。

中でも、玉子いりのお粥は塩味をつけてあって私の大好きな食べ物だった。

玉子…

はっとなった。

「お野菜さん、お米さん、いただきます。」

私は、いただくって事少しわかったみたい。どこかにいてくれるはずのおじさんに心の中で話かけ、クスリと笑い、スプーンで一口ずつ、ゆっくりと食べ始めた。

見た目は、満足しそうにない量だったのに、食べ終わるとお腹一杯

だった。

久しぶりの満腹感と食後の薬のせいで、気がつくと思ってしまった。

何となく誰かが、優しく頭を撫でている感じがして、私は思わず、

「おじさんなの？」

そう言いながら、目を開けた。

「ルウったら、夢見てたのかしら？」

この声…

「ママ…」

眠気も吹っ飛びベッドから飛び起きた。

「良かった。どうなるかと思ったわルウ。心配したのよ…ルウ元気になって早くお家に帰ろうね。」

ママは、私を抱きしめながら泣いた。

大好きって言わなきゃ…

おじさんと約束したし…

大好きなんだってママに言わなきゃ…

「ママ…ごめんね…」

私がママに言わなきゃならないのは、ママが大好きって事だったはずなのに、私の口から飛び出したのは、

「ごめんね」だった。

ママは、少し驚いた様子だったけど、

「そうよルウ、心配しすぎてママ変になりそうだったわ。もう二度とごめんよこんな事は！」

そう言つて、また私を抱きしめた。

「違うのママ…あたしいつもママにごめんねって言わなかったから…本当は、いつも最初にいわなきゃいけないかったのに…ごめんね。」

ママは、キョトンとして娘の話をただ聞いている。

「ママの大切な時計壊してごめんね。」

竜おじちゃんの玉子割つたりしてごめんね。

畑のスイカ割つたりして…キャベツ畑にウーちゃん放したりして…

ママ…ママ…ごめんなさい。」

そう言つてママに抱きついて泣いた。

「やだ…ルウもうそれは、ママとお話したし、終わった事じゃない。泣かないで、ルウだっていっぱい反省してたはずだし、もう二度とそんな事しないって分かつてたものママ。」

「寂しかったの、ママはいつもあたしといってくれたのに、遊ちやんが産まれてから、あたしより遊ちやんが大事なんだなって思っちゃつて…ママ…ごめんなさい、あたしママが大好きなのに、ママが困る事ばかりしてた…もうしないから、ごめんなさい。」

どれくらいぶりに、ごめんなさいを言えたんだろう？

どれくらいぶりに、素直に自分の気持ちをママに話せたんだろう？

「ねえルウ、ママもあなたに謝らなくちゃ、ごめんね。ルウが寂し

いんじゃないかなって思ってたはいたのよ。でも、遊ちゃんはまだ、赤ちゃんていろんな事に手がかかって、どうする事も出来ずに、ルウに甘えてたのよ。いつも、ルウの寝顔見ながら、ごめんねって言うってた。ママがいけなかったのよ。」

二人ともぐしゃぐしゃな顔で泣き笑い。

「ルウ、ママもあなたが大好きよ。とつても大事な私の娘。まだまだ遊ちゃんに手がかかってしまうから、前のようにかまってあげられないかもしれないけど、いつもママは、ルウが大好きだからね。」
ねえおじさん、私ねこれなのかなって思ったの。

私とママの掛け違えたボタンが今、ちゃんとした所に戻ったんじゃないかなあって。

食欲もモリモリ出て、みるみるうちに元気になった私は、2日目に点滴も外れ、1週間後には、退院できた。

家に戻った私を家族だけじゃなく、心配してくれた近所の人や親戚のおじさんおばさん達までが、お見舞いにきてくれた。パパもママも遊ちゃんも、お客様の相手でクタクタになっていた。私も代わる代わるきてくれる人達と話したりしたおかげで、入院してた事も忘れかけていた。

そんな時ママがふと言った、

「ねえルウ、明日おばあちゃんの所に行かない？」

「いいけど、突然だね。」

「ルウが入院したって聞いて、凄く心配してたのよ、でもおばあちゃん、足が悪いからお見舞いにこれなかったのよ。ルウの元気な姿見せてあげたくてね！」

「そう言う事ね。行くよおばあちゃん家！」翌日パパが、お仕事に

出かけた後、ママと遊ちゃんと私は車で、おばあちゃん家まで出かけた。

玄関先で、

「こんにちは、おばあちゃん、きたよ！」

大きな声で挨拶をした。奥の茶の間からおばあちゃんが、顔を出して、

「流花良くきたね、こっちに来て、元気になった姿見せてちょうだいな。」

「おじゃまします。」

そう言っただけの間まで走って行く。

ママも遊ちゃんを抱っこして後から茶の間にきて、

「この通り！元氣なルウよ。入院してたなんて嘘みたいなの良かったわ本当に。」

おばあちゃんにそう言っただけ。

おばあちゃんが、おやつにクッキーを出してくれて、ママと遊ちゃんとみんなで楽しくお話をしてくださった。

ママが、

「あら…もうこんな時間だね、そろそろお買い物してかえらなきゃ。」

そう言っただけの上のマグカップやクッキーをかたづけ始めたので、私もテーブルを拭くお手伝いをした。

「流花…ありがとね。立派なお姉ちゃんになったわね、ママのお手

伝い出来るようになったんだもの。あなたはきっと幸せになるわ。」

幸せに…

前にも誰かに言われたような気がして、テーブルを拭く手が止まった。

ふとサイドボードの上にある写真たてに目にとまる。

「あつ…！」

思わず声が出てしまった。

「ねえおばあちゃん、この写真のおじさんは誰？」

おばあちゃんに聞く。

「あらやだ流花ったら、おじいちゃんよあなたの。流花が知らないのも無理はないけどね…流花が産まれてくるのをとても楽しみにしてたの。でも…流花が産まれてくる２ヶ月前に事故にあってしまつてね、病院のベッドでママのお腹をさすりながら、幸せになれつて…最後にそう言つて、天国へ行つてしまつたの」

何度となくおばあちゃんの家には、遊びに来ていたのに、おじいちゃんの写真に気がつかなかったなんて…

私は愕然とした。私を優しく抱きしめたのは、私の話を温かく聞いてくれたのは、おじいちゃんだった。

おじいちゃんの写真を見つめて、ただ涙を流す私を見て、ママもおばあちゃんも驚いていた。

「ルウ…どうしたの？そう言えば、あなた病院で私におじさん…って…」

「何でもないよ、おばあちゃんの話しがあんまり切なかったから、涙が出ただけだよ。」

そう言っただけをふいた。

写真のおじいちゃんに向かって、

「ごめんね…おじさんなんて言っただけからありがとう。あたしは、おじいちゃんの事も大好きだよ。病院で会った事は二人だけの秘密にすることにした。またいつか会いたいなおじいちゃん…」

不思議そうな顔のママとおばあちゃんをよそに、

「ママ早く帰らなきゃいけないんですよ。さあ行こう！おばあちゃんまたね！」

私は、そう言っただけで走り出した。

P.S.

大好きなおじいちゃんへ…

私は、今幸せです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1469g/>

ごめんねって言うこと・・・

2010年12月2日11時06分発行